
チョコは条件で

芯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チヨコは条件で

【Nコード】

N5573D

【作者名】

芯

【あらすじ】

一人叫んでいるところを目撃された沙輝。その目撃者は、腐れ縁の航だった。航から条件付で言いふらさない事を約束してもらった。その条件とは……？

前編

放課後の教室。私は今、自分の席に座り1人で居る。

私は、山野^{やまのさき} 沙輝。中3。

いつもなら友達と帰るんだけど、ちょっと喧嘩をしまいムシャクシャして教室にUターンしてきた。

そして、今に至っている。

「もー！冗談じゃない！！」

黒板に向かって叫んだ。1人静かな教室に私の声が響いた。

こんなに、学校で大声を出したのは初めだ。

だいたい私はクラスでも目立つ方じゃなく、どちらかといえばおとなしい系だと思う。

だから、人様の前で叫ぶなんてあり得ない。

2

あー、なんかすつきりしたかも
そろそろ帰ろうかな

カバンを持ち席を立った。

ふと、ドアを見てみた。

そこには、閉まっているはずのドアが開いて男子が1人目を丸くして立っていた。

なんとそこには、腐れ縁で今までクラスが一緒の中田^{なかた こう} 航^{こう}がいた。

え・・・

もしかして、聞かれた？

よりもよって、航に・・・？

急いで顔を戻した。

心臓がバクバク鳴りはじめ、急に体が熱くなった。

もう最悪！！

そんな私に航が近づいてきた。

「あの一、大丈夫ですか？」

ニヤニヤしながら横で言った。

「うるさい！大丈夫よ！！」

そう言い捨て、ドアに向かって早足で歩いた。

最悪

明日絶対みんなに言いふらすに決まってる

昔からそんなヤツだもん

私にだけ、そんなことをする憎たらしいヤツ

視界が少し潤んできた。

ドアの敷居をまたごうとした時だった。

「おい。どーせ俺が明日言いふらすに決まってるなんて思ってるだろ？」

後ろから聞こえてきた。いつもの愛想のないような声で。

くるっと私は後ろを向いた。

「思ってるわよ！どうせ言いふらすんでしょ？言いたいなら言えば

いいじゃない!!」

1人で叫んだよりもっと大きな声で言った。
目から潤んでいた正体が落ちた。慌てて拭った。

そして、視線を下に落とした。

「誰も言いふらすなんて言っただけよ」
私は顔をガバツとあげた。

え・・・

「う、嘘だ!そんなこと言っただけ私を騙してるんでしょ!」?

「嘘じゃねーよ」

「ほ、本当に・・・?」

「どこまでこの俺を疑ってたんだよ!」

だって、こいつの言っていることはほぼ嘘に近いもん
何回引つかかってきたことやら・・・

疑い深い目で見つめた。

「おい!そんな目で見るな!!やっぱり言いふらすぞ!!」
「え!?あー、ごめんなさい!ごめんなさい!!」

そして航は改まって『コホン』と咳をした。
「ただし・・・、条件がある」

でた・・・、このパターン。
これにも、何回私は悩まされてきたことやら・・・

「な、何よ。簡単なことにしてよ」

「ふっふーん、簡単さ。今度のバレンタインに俺にチョコを作ってくること」

へ．．？

チョコ？

「義理はダメ？」

「ダメに決まってるだろ！」

チョコね．．．

今までのお返しに毒でも盛ってやろうかしら

口が少し緩んだ。

「あ、毒盛つたら言いふらすからな」

私の考えを読んだように付け加えて言った。

「だ、誰も盛りません」

私は慌てて弁解した。

「じゃ、14日の放課後4時30分に屋上に来いよ」
いつにもなくニコツと笑って航が言った。
胸がドキツとした。

『はい、はい』と適当に返事をして教室を出た。

な、なんで航なんかにドキツしててんだろ私。
とうとう、おかしくなったかな。
さ、とつと帰ろうつと。

玄関に向かって足を運びだした。

『14日の放課後4時30に屋上に来いよ』

その言葉と航の顔が、家に帰り着いてからも私の頭から離れなかった。

前編 (後書き)

さー、これからどうなるのでしょうか？？ (笑)

後編

そして、2月14日。

例のものをあげる日になった。

前日の放課後、私は急いで家に帰りチョコを作った。

私は、時々休みの日にお菓子を作ったりする。料理は得意といえば得意である。

チョコは仲のいい友達用と航用を作った。でも、いつもより倍時間がかかってしまった。

原因は、あの日の放課後航に言われた言葉と航の表情。

それが、四六時中頭から離れなかった。ずっと胸がドキドキしていた。

そして、屋上に向かっている今も胸がドキドキしている。

このドキドキは何？

なんで、いつも意地悪する航にドキドキしているの——？

手に提げている薄いピンクの紙袋の持ち手をギュツと握った。

こんなにドキドキしている私を航なんかに見られたくない。

でも、足はどんどん階段を登っている。

帰りたいはずなのに、どうして？

あいつはいつも私に意地悪をする。

なぜなの？

なぜあんなやつに胸がドキドキしているの？

考えれば考えるほど分からず、底なし沼にはまっていくようだった。

そして目の前には屋上のドアがあった。

どうしよう、胸のドキドキがおさまらない。

手が振るえている。

これは、何なの？

どうなっているの？

分からない、分からない！

こんなの見られたくない。

もう、こうなったら渡し逃げだ！！

少し銀の塗装が剥げているドアノブに手を伸ばした。

ギイと小さく鈍い音がしてドアを開いた。

思った以上に風が強く、髪が視界を遮った。

少し肌寒い。

「わっ」

乱れた髪を直しながら正面を見ると、背をむけ空を眺めている航がいた。

あ・・・

直しても直しても乱れる髪をなだめながら、ゆっくり航の方へ歩いていった。

そういえば、いつの間にあんなに背中が広くなったんだろう
身長も、私が高かったはずなのに
手の大きさも大きくなって入学した頃とは全然違う

胸のドキドキはさらに大きくなった。頭のでっぺんからつま先まで
体全体がドキドキしていた。航に近づくにつれてだんだん視線が落
ちてきた。

「よつ、ちゃんと作ってくれた？」

頭の上から聞こえてきた声に体がビクツとした。いつもよりやさし
い声だったから。

「あ、う、うん。はい、これ。じゃ、じゃあね」

少し震えながら言った。航に紙袋を押し付け、ドアに向かって帰ろ
うとした。

やった、渡し逃げ成功した。

と思ったが、私の体は動かなかった。左手の手首を掴まれていた。
その掴んでいる手を目で追ってみると航の顔に到着した。

「な、何？」

目を泳がせながら言った。

「・・・何で逃げるんだよ」

泳いでいる私の目を真っ直ぐ見つめて言った。

「べ、別に・・・、それより離してよ」

「やだ」

腕を振ってみたが、航の力は一層強くなるだけだった。

「どうして俺と目、合わせようとしななんだよ」

「そ、それは・・・。別に」
「別に何だよ？」

再び目を伏せた。

返す言葉に困ってしまった。だってこんなこと言えるはずがない。言ったら、笑われるに決まってる。

恥ずかしすぎて言えない。

手首を掴まれたまま沈黙の時間が少し流れた。

風は、そんな私たちの間をさつきと変わらず吹き抜けていく。

「・・・言ったら笑うかもしれないけど・・・」

沈黙を破って航が言った。

そして、私の体が強く引き寄せられ航の腕の中にすっぽりおさまった。

え・・・！？な、何がどうなってるのー！？

頭の中はすっかり混乱していた。

航の顔が近すぎるというぐらい間近にある。

「俺さ・・・、お前・・・沙輝のことずっと好きだった」

耳元で囁かれた。

「え・・・？」

ハッとした。

胸のドキドキが、今まで生きてきた中で一番というぐらい大きくなった。

や・・・。

聞こえてたらどうしよう。

「今までずっと言おうと思ってきたけど、何か照れくさくって。ついつい、お前見てると・・・何かモヤモヤして意地の悪いことしちゃってさ・・・」

少し照れくさそうに航が言った。

体を伝って航の心臓の音が聞こえてきた。
私と同じぐらいはやく鳴っていた。

・・・そっか、私も――。

「沙輝は、俺のことどう思う？」
ジッと私を見て言った。

「私も、同じ。航のこと・・・好き」
私も航の目をジッと見て言った。

「ほんとに！？やったー！！俺うれしい！！！」

「きゃっ」

ギュッと抱きしめられた。

なんか、かわいい・・・

思わず頬が緩んだ。

そして私も、航との間で縮こまっていた腕を伸ばし航の後ろにもっていった。

「沙輝・・・」

それに気づいた航は、より一層ギュッと抱きしめてくれた。

「これからもよろしくね！」

私は改まって言った。

「こちらこそ、よろしくな。受験、頑張らないとな」

「同じ高校いきたいもんね」

あ、そっか。

受験……。

「沙輝、頑張ろうな！」

「うん、そうだね。そろそろ、帰ろっつか。寒いし」

「そうだな」

手をつなぎ、教室へ帰っていった。

後編 (後書き)

ありがとうございました。
これからも、よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5573d/>

チョコは条件で

2010年11月14日01時35分発行